他者の変貌 ──『タイピー』から『ビリー・バッド』

福　岡　和　子

周知の通り、メルヴィルは同時代のアメリカ作家の中でも特異な経験の持ち主であった。彼は 1841 年 22 歳で捕鯨船アクシュネット号に船乗りとして乗船し、翌年には南海のマルケサス諸島に着いた。すぐに仲間の一人とその船から逃亡したものの、不運なことに「人食い人種」として知られたタイピー族に捕まってしまったのである。その捕囚体験を伝える処女作『タイピー ── ポリネシアの生活』（1846）は、一介の船乗りであったメルヴィルを作家として誕生させたのである。本論では、作家の原体験ともいえるタイピー族との出会いから初めて、メルヴィルの他者体験が、以後の作品においてどのように変貌していったかを追うものである。「他者」は作家にとってきわめて重要なテーマとなり、姿を変えては繰り返し作品に立ち現れるのである。

1

メルヴィルの処女作『タイピー』（1846）[1] には創作上の矛盾が散見されるが、

1　Herman Melville, *Typee: A Peep at Polynesian Life* (New York: Penguin Books, 1996). ↗

その最大のものは、プロット上要請される「他者」像と、それとは異なる「他者」の存在である。

　作品のプロットを要約すれば、ポリネシアの美しい島に到着してすぐ船から逃げ出した若者が、人食い人種の谷間に足を踏み入れてしまい、そこからしばし逃げ出せずにいたが、最後に漸く必死の思いで逃亡を果たす物語ということになるであろう。このプロットの要請から描かれる「他者」、タイピー族は、主人公トモが何をおいても逃げ出したくなるような存在でなければならないはずである。そうでなければ、物語の最後は読者を納得させるものとはならないであろう。

　島の乙女らと泳ぎやカヌー遊びに興じていたトモに、何としても囚われの身から逃げ出したいと思うようにさせたきっかけの一つは、刺青（イレズミ）である。腕だけなら刺青も仕方がないというトモの妥協案は退けられ、どうしても顔に刺青をするよう執拗に迫られる。彼自身が後に気づくように、タイピー族にとって刺青は彼らの宗教と密接に結びついており、顔に刺青を施すということは、まさしく「私を改宗させること」に他ならない。以前、トモは白人の宣教師がポリネシア原住民たちをキリスト教へ改宗しようとした実態を目の当たりにして厳しく糾弾したが、ここでは立場が逆転し、白人である彼自身が彼らの宗教へと改宗を迫られているのだ。しかも「私の聖なる顔が完全に破壊」されようとしている。顔に刺青を彫られてしまえば、まったくごまかしようがなく、さらには修復の仕様がない。言い換えるなら、彼はそんな顔を下げては帰国できないのである。つまり、ここでトモが迫られているのは、彼自身のアイデンティを捨てること、他者への完全なる同一化である。

　次いで、トモがどうしてもこの島を去りたいという強い願望に捕らわれるきっかけとなるもう一つの事件が起こる。それはタイピー族がかねてのうわさどおり人食いをしていた証拠を目撃したことである。それまで「ごまかし」、「ペテ

↘This Penguin Classics edition reprints the 1968 N N text in its entirety.

ン」、「紛れもない欺瞞」などの言葉で表現されていたタイピー族の不可解な行為が、ついに暴かれる。彼らの「ひょうたんの宴」が終わった後にトモが目撃した、肉片が生々しく残る痕跡は、いつ彼がその犠牲者にならないとも限らないという恐怖に戦かせただけではない。彼らが彼にとってどうしても同一化することは不可能なおぞましい「他者」であるという事実を突きつけたのである。

刺青、カンニバリズムともに、トモがタイピー族の仲間入りをしようとする限りにおいては受け入れなければならない条件だが、彼はそれらに対しては「抑えがたい嫌悪感」「表現しようのない恐怖感」を感ずるばかりであった。彼を内に取り込もうとする他者の強要に対して、肉体的感覚的に強い拒否反応を示しているのである。そこには理性の働く余地はなく、ただもうひたすら機会あれば逃げることを願うばかりなのである。その挙句は追っ手の一人を殺すことになってしまう。

以上見たように「物語」の最終段階に提示されるタイピー族は、トモにとって不可解なおぞましいとさえいえる絶対的他者であり、同一化するなど到底不可能な存在だったのである。しかし、言うまでもなくこの作品においては、それとはまったく異なるタイピー像が既に我々読者に提示されているのである。

> As I extended my wanderings in the valley and grew more familiar with the habits of its inmates, I was fain to confess that, despite the disadvantages of his condition, the Polynesian savage, surrounded by all the luxurious provisions of nature, enjoyed an infinitely happier, though certainly a less intellectual existence, than the self-complacent European. . . . But the voluptuous Indian, with every desire supplied, whom Providence has bountifully provided with all the sources of pure and natural enjoyment, and from whom are removed so many of the ills and pains of life ── what has he to desire at the hands of Civilization? . . . .
>
> But it will be urged that these shocking unprincipled wretches are cannibals. Very true; . . . But they are such only when they seek to gratify the

passion of revenge upon their enemies; and I ask whether the mere eating of human flesh so very far exceeds in barbarity that custom which only a few years since was practised in enlightened England: ── a convicted traitor, perhaps a man found guilty of honesty, patriotism, and suchlike heinous crimes, had his head lopped off with a huge axe, ...

The term “Savage” is, I conceive, often misapplied, and indeed when I consider the vices, cruelties, and enormities of every kind that spring up in the tainted atmosphere of a feverish civilization, I am inclined to think that so far as the relative wickedness of the parties is concerned, four or five Marquesan Islanders sent to the United States as Missionaries might be quite as useful as an equal number of Americans despatched to the Islands in a similar capacity.（Ch. 17, 124–126）

この文章の特徴は、体験したタイピー族の現実を過去形で語るというプロットをいつの間にか語り手が逸脱し、現在形で雄弁に語り出すということである。つまり主人公がタイピー族の日常を目にしながら彼の心中に次々と浮かんでくる感想を綴ったものではもはやない。この箇所はプロットとは直接の関わりを持たない、別個の「エッセイ」とさえ言ってよいものである。ポリネシアの住民とヨーロッパやアメリカの文明人との対比において、後者の野蛮性、残酷さを厳しく批判するとともに、前者の楽しい、幸せな生活を称揚しようとするものである。この文章がプロットと関わりを持たない証拠の一つは、語り手が後に彼自身が脅かされるカンニバリズムを弁護していることに見て取れる。

M. ブライトウィザーは、彼の論文のタイトル（「メルヴィルの『タイピー』における偽りの共感」）が示すごとく、トモは自分の問題にのみ囚われていて実際はタイピーを見ていないのだと批判する。ブライトウィザーの言葉をそのまま引用すれば「裸の自然が西洋世界の船長の隣に立っている限りトモは喜んでいる」[2] ということになる。西洋社会を批判するときだけタイピー族を持ち

2　Mitchell Breitwieser, “False Sympathy in Melville’s *Typee,*” *Herman Melville: A* ↗

上げるのだというのである。その指摘は必ずしも間違っているとは言えないが、ブライトウィザーに欠けているのは、メルヴィルの執筆上の時間的“ずれ”に対する認識である。異文化を体験したトモと、後にそれについて書くことになるメルヴィルとの時間的ずれである。ここにみられるタイピー礼賛は、谷間から漸くにして祖国に逃げ帰った人間がしばしの時を経て、自分の暮らす文明社会に対する洞察を深めるとともに、ますますその欺瞞性、酷薄さ、住みづらさなどを意識しだしたときに、強くなっていったものと言うことができる。「アメリカが送った宣教師同様、こんどはアメリカにタイピー族を呼べばいい」といった発想が、この文章を書いた彼が立つポジションを明確に示していることは言う必要もないであろう。『タイピー』における矛盾する二つの他者像は、以上のように創作上の問題と密接に関係するのである。

2

作品『タイピー』の「物語」自体は、主人公の島からの逃亡、捕囚からの開放で終わった。それは楽園というイメージが壊れ、無邪気な原住民たちの裏に隠されていた凶暴性、不可解さが露わになった瞬間でもあった。言い換えれば、それは主人公が容易には同一化することができない他者の存在を認識させられる瞬間であったということができる。しかし、そうしたプロットの終結は、同時に語り手の強い羨望と賛辞を引き出す幸せな蛮人像とは直接の関係がないことはすでに見たとおりである。

しかし、興味深いことに、およそ5年後『白鯨』[3]を書いたメルヴィルにとっては、そうした矛盾はもはやない。そこでは南海の島ははっきりと驚くべき変

↘*Collection of Critical Essays,* ed. Myra Jehlen (New Jersey: Prentice Hall, 1994) 21.

3 Herman Melville, *Moby-Dick or The Whale* ed. Harrison Hayford, Hershel Parker and G. Thomas Tanselle (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1988).

貌を遂げている。

> Consider the subtleness of the sea; how its most dreaded creatures glide under water, unapparent for the most part, and treacherously hidden beneath the loveliest tints of azure. Consider also the devilish brilliance and beauty of many of its most remorseless tribes, as the dainty embellished shape of many species of sharks. Consider, once more, the universal cannibalism of the sea; all whose creatures prey upon each other, carrying on eternal war since the world began.
>
> Consider all this; and then turn to this green, gentle, and most docile earth; consider them both, the sea and the land; and do you not find a strange analogy to something in yourself? For as this appalling ocean surrounds the verdant land, so *in the soul of man there lies one insular Tahiti, full of peace and joy, but encompassed by all the horrors of the half known life.* God keep thee! Push not off from the isle, thou canst never return!（Ch. 58, 274）（Italics mine）

イシュメルは海に生息する生き物たちがお互いを餌食にする様を「海の普遍的なカニバリズム」と表現し、一方で人間の魂をその海に囲まれた「平和と喜びに満ちた孤立した島タヒチ」と表現する。それにしても、なぜ「タヒチ」なのか。確かに、タヒチは美しい南海の島であり、メルヴィルにとってさまざまな記憶を蘇らせる地名であろう。にもかかわらず、ここで言う「タヒチ」は地図上に現実に存在するタヒチとはほとんど関係がないと言ってもよい。なぜなら、実際にタヒチに上陸した経験を持つメルヴィルが『タイピー』のなかで繰り返し嘆いていたとおり、当時すでに現実のタヒチは、「平和と喜びに満ちた島」ではなくなり、島も住民も「文明」に蹂躙され、あまりに無残な姿を晒していたのである[4]。したがって、この「平和と喜びに満ちたタヒチ」は、現実

4　“Under cover of a similar pretence, have the outrages and massacres at Tahiti the beautiful, the queen of the South Seas, been perpetrated.”（Ch. 3 p. 18）

にフランス軍の帝国支配を受ける以前のタヒチ、あるいは、まだ未開の状態にあった南海の島々全般を指すと考えたほうがいい。いやむしろ、『タイピー』で語り手が憧憬をもって詳述した「幸せの谷間」、悲しみも不安もない陽気さに満ちあふれた、あのタイピーの谷間そのものではないのだろうか。

しかし、このような「タヒチ」の象徴的意味の起源とでも言うべきものを指摘した上で、筆者は、さらにこの引用の持つもう一つの注目すべき特質を指摘しておきたい。というのは、あの「幸せの谷間」に住むタイピーの蛮人たちは、悲しみや苦労を免れない悲惨な文明人と対比されるとき、衝撃を与えずにはおかない陽気で幸せな「他者」であったが、また一方で、その人々は、カンニバリズムを行う恐るべき「他者」、同一化の不可能な絶対的「他者」であったはずである。ところが、この引用においては、彼らの恐るべき一面は「世界が始まって以来」カンニバリズムが行われ続けている恐ろしい海として、一方、彼らの穏やかで平和な一面は「タヒチ」の緑美しい島として分離されて、それぞれ異なる表象を与えられる。しかも、そうした分離のみならず、注目すべきことには、「タヒチ」は人間の内部にある魂そのものへと内面化されているのである。つまり、タイピーから「タヒチ」への移行は、「他者」の「自己」内部への転位を表すものに他ならない。人間が必死になって外なる恐ろしい世界から守るべきは、人間自身の内部に潜む緑の谷間、平和で喜びに満ちた穏やかな島だというのである。

外なる恐怖に満ちた世界から守られるべき内なるものは、87 章、『白鯨』のなかでも最も すばらしいシーンの一つで具象化される。

> And thus, though surrounded by circle upon circle of consternations and affrights, did these inscrutable creatures at the centre freely and fearlessly indulge in all peaceful concernments; yea, serenely revelled in dalliance and delight. But even so, amid the tornadoed Atlantic of my being, do I myself still for ever centrally disport in mute calm; and while ponderous planets of unwaning woe revolve round me, deep down and deep inland there I still bathe

me in eternal mildness of joy.（Ch. 87, 388-389）

捕鯨船に追われた鯨の大群が混乱と狂乱を極めるなか、いつの間にか何重もの同心円が描かれ、そのもっとも奥の中心部は「魔法にかけられたような静けさ」が存在し、そこでは外なる世界の狂乱に気づいていない母親や赤ん坊の鯨の伸びやかな生の営みが、あるいは若い鯨の性の営みが繰り広げられているのである。ここでも、イシュメルはそれらの有様を外なるものとして傍観するのではなく、彼自身の内部における静かなる凪、苦しみや悲嘆に侵されることない穏やかな喜びの、そして生命にあふれた空間を表象するものとして見ようとする。

以上、イシュメルの語りに突如現出した「タヒチ」は、文明化、キリスト教布教という大義を掲げて迫る帝国主義的現実に直面し、無垢で平和な社会の喪失という危機に瀕している南海の島の「他者」ではない。「タヒチ」は今や人間の中心に存在する無垢で平和で穏やかな「自己」を表象するものとなって、外なる狂乱の世界から守られねばならない。この「他者」の内在化とも言うべき表象化は、他者であるポリネシアの人々の危機的状況を、文明国にすむ自己の危機的状況として受け止めたものということができる。つまり、ここには文明国での「他者」としての自分が存在しているのである。周知のように次作『ピエール』においては、イシュメルの「タヒチ」、彼が断固として守るように呼びかけた自己の内なる「喜びと平和の島」は崩壊し、空漠とした海に漂うしかない主人公の悲劇が描かれることになる。しかし、他者性に焦点を置く本論では、『ピエール』論には入らず、メルヴィルの最晩年の作品『ビリー・バッド』に、その後の変貌を探りたいと思う。

3

一介の船員であったメルヴィルを作家として誕生させた「他者」体験は、後

に彼が書くことになる複数の作品において微妙に姿を変えて繰り返し立ち現れる。まさしくそれはフロイドの言う “the uncanny” だと言ってもいいかもしれない。フロイドによれば、「不気味なもの」とは、過去において抑圧されていたものであり、それはその後の人生において繰り返し出現してくるという。前章では、イシュメルの読者に対する一つの呼びかけに見た「他者」の変貌に着目した。それは「他者の内在化」、つまり、南海の美しい島において滅ぼされていく陽気で無垢なる人々を、文明人にとっての外なる「他者」ではなく、残酷で容赦ない外界から守るべき内なる無垢な人間性として自らのうちに置き換えて見ようとするものであった。本章では、メルヴィルが死ぬまで修正加筆の手を休めなかった『ビリー・バッド』[5] において、そのテーマ、すなわち自己と他者の問題がどのように展開されているかを検討したい。これから見ていくように、そこでは、他者性のテーマが現実の世界を舞台とし、より歴史的なパースペクティヴをもって扱われている。アメリカのみならず西洋諸国がそれまで辿ってきた歴史に対する認識が、その背後にある。これから「物語」に即してより具体的にその問題を考察していくが、その「物語」はまた歴史の封殺の物語でもある。

物語は、イギリス海軍とはそれまでおよそ縁のなかった率直で無垢な若者ビリーが軍艦に徴用されたときに始まる。彼は上官によって反乱を画策していると虚偽の申し立てをされ、驚愕のあまりその上官を殴り殺してしまう。その結果、彼は艦上で処刑されるのである。

イギリス海軍にやってきた、この不幸な若者ビリーは、一体何者だったのか。確かに名前、肌の色、話す言語から判断して、ビリーはイギリス人のように見える。が同時に、語り手は、ビリーが他人の家の前に捨てられていた父親も母親も知らない孤児であるとし、巧妙にその出自をイギリス人からは切り離そう

5　Herman Melville, *Billy Budd, Sailor*（*An Inside Narrative*）ed. Harrison Hayford and Merton M. Sealts, Jr.（Chicago & London: The University of Chicago Press, 1962）.

としているかのようにも見える。そのように考えるとき、これまであまり注目されることのなかった次の２つの引用は、その問題、つまりビリーは何者かについて重要な示唆を与えてくれるように思われる。

> A somewhat remarkable instance recurs to me. In Liverpool, now half a century ago, I saw under the shadow of the great dingy street-wall of Prince's Dock. . . . a common sailor so intensely black that he must needs have been a native African of the unadulterate blood of Ham ── a symmetric figure much above the average height. The two ends of a gay silk handkerchief thrown loose about the neck danced upon the displayed ebony of his chest. . . his face, lustrous with perspiration, beamed with barbaric good humor. In jovial sallies right and left, his white teeth flashing into view, he rollicked along, the center of a company of his shipmates. These were made up of such an assortment of tribes and complexions as would have well fitted them to be marched up by Anacharsis Cloots before the bar of the first French Assembly as Representatives of the Human Race.（43）

> Not that like children Billy was incapable of conceiving what death really is. No, but he was wholly without irrational fear of it, a fear more prevalent in highly civilized communities than those so-called barbarous ones which in all respects stand nearer to unadulterate Nature. And, as elsewhere said, a barbarian Billy radically was ── as much so, for all the costume, as his countrymen the British captives, living trophies, made to march in the Roman triumph of Germanicus. Quite as much so as those later barbarians, young men probably, and picked specimens among the earlier British converts to Christianity, at least nominally such, taken to Rome（as today converts from lesser isles of the sea may be taken to London）, of whom the Pope of that time, admiring the strangeness of their personal beauty so unlike the Italian stamp, their clear ruddy complexion and curled flaxen locks, exclaimed, "Angles"（meaning *English,* the modern derivative）, "Angles, do you call them? And is it because they look so like angels?". . . . .
>
> Billy listened, but less out of awe or reverence, perhaps, than from a

> certain natural politeness, . . . And this sailor way of taking clerical discourse is not wholly unlike the way in which the primer of Christianity, full of transcendent miracles, was received long ago on tropic isles by any superior *savage,* so called ── a Tahitian, say, of Captain Cook's time or shortly after that time. Out of natural courtesy he received, but did not appropriate. It was like a gift placed in the palm of an outreached hand upon which the fingers do not close. (120–121)

第一の引用、それは作品冒頭これから「ハンサムな船乗り」についての話を始めようとする語り手の記憶に浮かんできた、ある人物への言及である。それにしても、なぜその筆頭が肌の色の違う黒人水夫なのか。いわゆる「ハンサムな船乗り」というタイプの典型というのであれば、最晩年にあった作者メルヴィルは、若い頃に出会った懐かしい実在の人物ジャック・チェイスの思い出から始めてもよかったかもしれないのだ。実際メルヴィルはこの作品の献辞を彼に手向けている。しかし語り手は、上に見たように、陽気でダンディな黒人の船乗りの思い出から始める。均整の取れた美しい健康的な肉体を持ち、冗談をとばし、自信と誇りに満ちて堂々と波止場を闊歩する黒人水夫は、人種の異なる船乗り仲間の尊敬と愛情を引き出し、彼らを偶然見かけた人々を驚嘆させてさえいたのである。黒人を中心とした雑多な人種から成るそのグループを、語り手は「人類の代表」とまで言ってのける。

作品の冒頭にこのハンサムな黒人船乗りを据えること、のみならず、彼を「人間集団」の中心に据えること、それが如何にラディカルな着想であるかを知るには、メルヴィルがこの作品を書いていた頃の現実のアメリカ社会を考慮に入れれば、あまりに明らかである。ここで詳細に触れるつもりはないが、19世紀末は南北戦争という流血をもって成し遂げられた奴隷制廃止、黒人奴隷の解放にもかかわらず、アメリカ社会における人種差別は以前にも増して凄惨を極めていたのである。したがって、黒人をリーダーに据えた多様な人種から成るグループを「人類の代表」として冒頭に掲げたことは、当時のアメリカの

読者にとって、作者のあからさまとも言える挑戦的行為と映ったかもしれない。（もちろん当時出版されていればの話であるが。）しかし、「人類の代表」としての黒人というだけではなく、黒人船員自身が語り手の記憶に残るほどに堂々とし意気揚々としていて皆から愛されていたことの方が重要かもしれない。大げさな言い方をするなら、アメリカ文学において、そのような幸せな黒人が登場した作品を我々はいくつ想起できるであろうか。

次いで、第二の文章であるが、今度は作品も終わりに近づいた、あるシーンから引用したものである。ベリポタント号の牧師がキリスト教徒にふさわしい死の迎え方を伝授しようとして、翌朝の処刑を待つビリーを訪れる場面である。非常に興味深いのは、この場面を描く語り手の意識の中には時代も場所も異なるいくつものシーンが次々と想起されている点である。その一つは、征服者Germanicus Caesar（15 B.C.–A.D. 19）のもとへ捕虜として連れて行かれた「裸のイギリスの蛮人たち」。法王 Gregory the Great（540?–604）のもとへ、キリスト教へ改宗した見本として送られた「蛮人のイギリス人たち」。今日、つまり 19 世紀に（おそらく南海の）小さい島々からキリスト教へ改宗した見本としてロンドンへ送られてくる「蛮人たち」。さらに、Captain Cook（1728–79）の時代か、その少し後、南海の島タヒチを訪れた宣教師たちによってキリスト教の祈祷書を手渡されたタヒチ人。

明け方の処刑を前にして、しばしの眠りについている若者と彼を訪れた牧師のことを語ろうとする語り手の意識の中に、時代も場所も異なるいくつものエピソードが断片的に次々と立ち上ってくる。それにしても、一介の船乗りを前にして抱いた連想にしては、それらは異常にさえ映るかもしれない。「異常」と思われる理由の一つは、個々のエピソードが時代も場所もあまりに異なるからである。それらは、いずれも一見ポスト・コロニアル的視点からの解釈を促しているようにみえる。どのエピソードにも、一つの民族が武力で他民族を征服し、同一化させるべく改宗を迫る支配の構図が読み取れる。あるいは、改宗させた蛮人たちを、文化的支配の眼に見える成果として国民の前に行進させ、

自らの権力を寿ぐ支配者の姿がみいだされる。語り手は、ビリーと軍艦つき牧師との出会いに、過去に繰り返され、今も行われている民族間の政治的支配と改宗の歴史を重ね合わせて見ているように思われる。

しかし、それにもかかわらず、語り手が言いたかったのは、そのような常套的支配の構図だけではないことに注目しておかなければならない。語り手がそこに共通してみているのは、彼らを支配した文明国のキリスト教徒たちに対して、自分たちが「ラディカルな蛮人」であることを、卑下することなく意気揚々と誇示している「名目上の改宗者」の姿なのである。彼らは、キリスト教の祈祷書を「生まれついての礼儀」から、ただ受け取っただけという。眠るビリーを眺めながら次々と想起される、過去と現在の支配者と被支配者の出会いの瞬間を、少なくとも語り手はそのように解釈しているのである。改宗させられた者、征服された者として、押し付けられた「他者」（costume）を装っているにもかかわらず、つまり政治的征服を受けたにもかかわらず、その本質はなんら変化を受けることなく、堂々と健康的で美しい肉体を文明国の都に現した「蛮人たち」なのである。

以上見た 2 つの文章から示唆されてくるもの、それはビリーという人物を造形した作者の意識の中には、黒人、イギリス人、タヒチ人といった人種も国籍も異なる様々な「ハンサム」な男たちの姿があったということである。しかも彼らはそれぞれの時代に、政治的あるいは社会的に被征服者、被抑圧者とされながら、「ラディカルな蛮性」を失わず、陽気で堂々とした自らに対する強い誇りを備えた人たちであった。彼らはいずれも未開人としてただ蔑まされる存在ではなく、むしろ時の法王をして “angels” を連想させた、不思議な「美しさ」を備えた人たちであった。そこには時も場所も異なる歴史的事実、国籍も人種も異なる人々を大胆に重ね合わせる語り手の、ある意味では「過激」ともいえる視点がある。しかも、注目すべきは、語り手のそうした過激な視点から出てくるもの、それが、人間それ自体（the Human Race）の内部に存在するはずの「ラディカルな蛮性」、語り手の言葉で言えば、「絶対的な無垢」への憧

憬であるとさえ言えることである。ここにも我々が前章で見た「他者の内面化」のプロセスに通じるものがあるのではないだろうか。人間の歴史、それは繰り返される「他者」の抑圧、支配の歴史である。しかしその「他者」は決して屈することなく、繰り返し「ラディカルな蛮人」、健康で陽気な若者の姿を取って我々の前に立ち現れるのだ。そして、この作品においても、ビリーという若者の姿となって再び 18 世紀のイギリス海軍に登場する。しかしこれから我々が論じる "an inside narrative" は、その若者をイギリス海軍が「他者的存在」(alien) として再び葬り去るさまを描いているのである。

4

事件は 18 世紀のイギリス海軍で起こる。語り手によれば、当事「強制徴募」は頻繁に行われ、例えば、警察が頑健そうな怪しい男を見つければ、すぐさま捕まえて艦隊に送り込むか、あるいは監獄から囚人を直接引き出して送り込んだという。また、自発的に乗り込んだ乗組員であっても、愛国心や海の生活への憧れなどあるわけではなく、不道徳ないかがわしい人間や借金を抱えた人間が海軍を避難所として使ったという。しかし今ここで問題としたいのは、そのような事実の存在そのものよりも、「政府は明らかな理由のためにそのことを公言しようなどとは思わなかった」(66) という体制である。そこまでして乗組員をかき集めなければならない当事の政治的状況があったということは別にして、政府、海軍がその実態を隠そうとしたということ、そこにこそ、それら機関の体質が示されている。事実の隠匿は、言い換えれば「美しい話」の創造となる。表向きは海軍に勤務する人間は、イギリス国王に忠誠を誓い、イギリス国家に愛国心を持った男たちであることが喧伝されたのである。「愛国心はならず者が最後に避難するところである」というジョンソン博士の名言は否定され、愛国心に満ちた「美しい物語」が作り出される。イギリス人船員の愛国的献身ぶりを歌った詩人ディブディンは、年間 200 ポンドの年金をイギリス

政府から受け取っていた御用詩人であった事を、メルヴィルは『ホワイト・ジャケット』のなかで暴露していたことを想起すべきであろう。

さらに「事件」が起こるのは、海軍が隠蔽せねばならない別の由々しい事態が生じた時期でもある。語り手は同年（1797）に起こった乗組員による二つの暴動に繰り返し言及する。ここでは詳細は控えるが、いずれも海軍の権威を失墜させるような出来事であった。忠誠を誓い国のために己を捧げるべき乗組員たちの反乱を海軍が認めるはずはない。イギリス国家、およびイギリス海軍の権威は厳しい懲罰でもって維持されたのである。そして、次の引用に示唆されるように、国家、海軍はそれらの暴動を歴史から葬り去ろうとした。

> Such an episode in the Island's grand naval story her naval historians naturally abridge, one of them（William James）candidly acknowledging that fain would he pass it over did not "impartiality forbid fastidiousness." And yet his mention is less a narration than a reference, having to do hardly at all with details. Nor are these readily to be found in the libraries. Like some other events in every age befalling states everywhere, *including America,* the Great Mutiny was of such character that national pride along with views of policy would fain shade it off into the historical background. Such events cannot be ignored, but *there is a considerate way of historically treating them.* If a *well-constituted individual* refrains from blazoning aught amiss or calamitous in his family, a nation in the like circumstance may without reproach be equally discreet.（55）（Italics mine）

この引用には、メルヴィルがこの作品に "an inside narrative" という副題をつけた意図が明白に示されている。国家のプライドを傷つけるような出来事、あるいは恥となるような事実は、「思慮深い」方法で歴史的に記述される、つまりは「慎重な」方法で隠蔽されるという。そうした歴史に対する「思いやりのある」改ざんは、「アメリカを含むすべての国家において」行われていると、語り手は痛烈な皮肉を交えて示唆するのである。"a well-constituted individual"

という表現には、「立派な憲法を有する国家」への当てこすりがあることは言うまでもないだろう。時代を問わず、どこでも行われたという「慎重な」歴史の隠蔽、それをこのように指摘する語り手は、彼がこれから提示する “an inside narrative” こそは、そうした歴史改ざんの過程を暴露するものであることを暗示しているのではないだろうか。ビリーの処刑は、国家による「思慮深い」事実隠蔽の一つの形なのだと。さらに、イギリス海軍を舞台としたこの作品で、「アメリカ」がわざわざこのように言及されているのは、語り手の念頭にアメリカによる何らかの具体的な歴史改ざん行為があったことを物語るものである。

しかし注意しなければならないのは、ベリポタント号においては、そうした「思慮深い」歴史改ざんは、ビリーの事件とともに始まるのではない。乗組員たちの言語活動をみれば、事件の起こる前からすでに隠微な形で進行しているのである。ベリポタント号の上では、ビリーを除く殆どの登場人物が率直な言語行為を奪われている。たとえば、艦長のヴィア自身気づいているように、「士官たちですら、あらゆる場合に最近の出来事に対してどのように言及するか大変な注意を払っている。」(93) また、ビリーが信頼を寄せた老船乗りダンスカーですら、「クラガートがビリーに悪感情をもっている」ことを指摘するものの、それ以上のことは説明してやろうとはしない。語り手によると「上官の意思に一生仕えてきた抜け目のない人間」は「簡潔で慎重なシニシズム」を特徴とするものだという。言い換えるなら、事実を見抜いていたとしてもそれを口にすることで事態が変わらない、それどころか自分に災いが及ぶかもしれないことを知っている人間は、沈黙を守って自己を防御するということである。したがって彼は「決して何物にも干渉しない、決して忠告を与えない」(86)。早くからクラガートの陰謀を見抜いていた唯一の人間であるダンスカーは、ひょっとしたらベリポタント号上でビリーを救いうる唯一の人間だったかもしれない。しかし、彼は最後まで沈黙を通し、救いの手を差し伸べなかったのである。

クラガートの場合もことは同じである。彼の組織との関わりは、単なる先任衛兵伍長という職務のみにあるのではない。むしろ彼こそ、我々が問題として

いるイギリス海軍の特徴をまさに体現した人物と言えるのではないか。というのも、彼の最大の特徴は表面と実態が異なることにある。見かけは、俗悪なところが一切なく「禁欲的な類の文明」、言い換えれば「恥ずかしくない体面」を保っている。しかし、「穏やかで慎み深い物腰」の内側では、理性を欠いた狂気が渦巻いている。言い換えれば、クラガートは保身のために実際の己を隠し、常に二重性を生きなければならない。したがって外からみれば完全に正気で理性的な人間と変わらない。もちろんクラガートの場合、語り手によれば、その二面性、秘密主義（secretiveness（80)、protectively secretive（76)）は、軍艦での生活の影響というよりは、彼自身の「生まれつきの堕落」によるものという。しかし原因は何であれ、そうした彼の特質は、今彼が勤務する軍艦それ自体の特質、事実を抑圧し隠蔽を図る体質をまさに体現したものと言える。だからこそ、彼は先任衛兵伍長として、艦内の秩序維持に当たるにふさわしい。「方法と表面上の手続きはいつも完璧に合理的である」というクラガートについての記述は、まさしくビリーを処刑へと追いやった軍艦上の手続きと方法論を示す言葉でもあるのだ。表と裏が異なる二面性を持った存在、狂気を慎重に隠蔽し、一見知的で上品な話し方と物腰をもったクラガートという存在は、まさしく法という高度に知的な方法論、更に「思慮深く慎重な」歴史改ざんを実行してきた文明国家そのものを体現するとさえ言える。そして、クラガート自身がひたすら隠している内なる情念が、あるとき屈折した形で暴発するように、艦隊においても抑圧された水兵たちの暴動は、一たん鎮圧されたとしても再び発生するのである。

以上見た海軍とそこに勤務する乗組員たちが日常的に余儀なくされている二重性、秘密主義をもっとも端的に示しているのは、実は艦長ヴィアその人である。しかし、彼の場合、二重性を生来のものとするクラガートとは異なる。ヴィアについて語り手は次のような面白い表現をしている。「彼のような人物に備わる正直さは、まっすぐであることを求める、それは時には渡り鳥がまっすぐに飛んで国境を越えてしまっても決して気にすることはないのと同じような程

度なのである。」(63) このようなヴィアの正直でまっすぐな性格は、普段隠していても刺激されればすぐ姿を現してしまう。ビリーの「危険性」を上申に来たクラガートが「志願ではない別の形で国王陛下の元に仕える」という間接的な言い方をしたときに、「遠まわしの言い方は止めろ (be direct!)、強制徴募された乗組員と言え」(92) と苛立ちを見せたヴィアにその一端が見て取れる。クラガートの得意とする間接的表現は、ヴィアにとって非常に不愉快なのである。が一方で、今度はクラガートが最近暴動の起こった船の名前を大胆にも口にしようとしたとき、ヴィアは顔色を変え、下士官風情が艦長の前でそのことを口に出すなど「非常に不遜な図図しさ」(93) だと怒りを露わにする。つまり、ヴィア自身が率直な言動を封じ込めるベリポタント号の現状を当然視し、黙認しているのである。いきなり思いがけないことを言い出したクラガートに動揺し、ヴィアはおそらくは普段は見せることのない矛盾をこのように露呈してしまったと言うことができるであろう。もちろんその矛盾とは、彼に生来備わる資質と職務上身に着けた体質との矛盾である。言い方を変えれば、彼はその矛盾を抱えながら、表面に出てくることがないよう日常的に押さえ込むことを余儀なくされている。

しかし、ここで注意を喚起したいのは、そうした相容れるはずのない二つの特性を艦長として同時に生きざるをえないヴィアの矛盾、それが単に彼個人の問題に終わらず、思いがけない形で波紋を広げたという事実である。というのも、ビリーのクラガート殺人という悲劇は、ひょっとしたらヴィアのそうした矛盾が一つの引き金になったと言うことができるのではないか。クラガートの申し立ての虚偽を証明するためにビリーを呼び出したヴィアは、ビリーに対して二度にわたって「話しなさい！自己を弁護しなさい！」と「命令」する。しかし、この「話す」ようにという「命令」が、実はいかに矛盾に満ちたものか、その時ヴィア自身気づいていなかったのではないか。すでに見たように、艦上では通常、乗組員たちは決して正直に「話す」ことは許されていない。しかも上官の申し立てに逆らうことなどありえない、そのような自由と権利は認めら

れてさえいないのである。「人権号」からこの艦船に移った当時、目撃したビリーを震え上がらせてしまった鞭打ちの刑は、決して規律の乱れを認めないヴィア自身の「命令」したものに他ならない。にもかかわらず、今問題にしている場面では、クラガートの申し立ての虚偽、ビリーの無実に対するヴィア自身の直感が、ヴィアに艦長としての立場を離れさせてしまったのである。言い換えれば、一時的にせよ、ヴィアを本来の姿に引き戻し、ビリーを一個の人格を備えた人間として扱い、更には息子に対する父親のように振るまわさせることになったと言ってよいだろう。しかし、繰り返すなら、ヴィア自身が意識していないにもかかわらず、彼が思わず振舞ってしまう二重性、言葉を封じ込める権威者としての立場と、率直な言葉を引き出そうとする父親的存在、その両者の矛盾こそ、ビリーをあの瞬間、麻痺に陥らせ、逆に言葉を奪ってしまったのではないだろうか。

さて、ヴィアがビリーの行為を引き出した一つの原因が自分自身の存在の矛盾にあることを、そのときどれほど確かに自覚していたかどうかはわからない。しかし、その後の処置においては、その矛盾が船全体に、更に乗組員全体に影響を及ぼすことは極力避けねばならないことは認識したといえる。「厳しい軍人が父親に取って代わった」(100)、つまり、ビリーの処遇の決定については、一切の曖昧性、矛盾を表に出さないこと、厳しい規律に完全に従い死刑を直ちに断行することをヴィアは決断する。急遽召集された軍法会議でのヴィアの弁舌については、これまで様々な批評家から厳しい批判がなされている。例えば、C. N. マンラヴによれば、1. 法そのものに道徳的責任があり、その施行者は責任を免れているとすることにより、ヴィアは良心を殺すことで士官たちを誘惑しようとしている。2. 法の維持、施行はその法が表面上基づいているはずの正義と不正の基本原則を無視して成立つとされている。3. ヴィアはここで一つの行動原則を提示しているが、それはビリーの処刑を正当化するものではない。ビリーを処刑しなければ暴動が起こるかもしれないという不安があるために士官たちは最終的に動かされるのであって、提示された原則は自己防衛を隠

蔽するものである。4. ビリーのケースと涙ながらに裁判官に訴える女性のケースとの類似性は不適切である。女性の場合は被告が行為においても動機においても有罪かもしれないが、ビリーはそうではない。5. そのつもりがないのに殺してしまったビリーに対して、結果として殺したのであれば、殺す意図があったのだとする voluntarism の押し付け、海に対する陸地の論理の押し付けがある[6]。

確かに C. N. マンラヴが言うように、メルヴィルは彼の物語を「文明のテストケース」としたことは間違いがないし、そこでは文明は終局的に人間性を破壊する「ジャガナート神」（277）に他ならない。また、ヴィアが士官たちを相手に試みた説得は、確かに C. N. マンラヴが指摘したような論理的問題、倫理的問題を孕んでいるのも事実である。つまり、法を実行に移す者の道徳的責任逃れ、正義の無視、姑息な自己防衛、行為と動機の乖離など、そのすべては確かにビリー処刑という形で事件の収束を図ろうと決意したヴィアが用いた説得の過程一つ一つに見てとれるものである。そしてそれらこそ、我々が以前に指摘した「思慮深い」歴史改ざんの過程に他ならない。しかし一方で、それらすべてをそのままヴィアに帰属させてしまうのでは、この作品の重要な一面を見落としてしまうことにならないだろうか。我々が忘れてならないのは、ヴィアが敢えて国家の（あるいは文明の）論理を自らに引き受けようとしているということである。恐らくはそうした論理の卑劣さ、自己中心性、無責任、冷酷さなどのすべてを熟知しながら、彼はそれを実行することを自ら引き受けようとしているのである。あるいは、海軍のそうした卑劣で冷酷な実態を熟知しながらも、艦長として無実の若者を処刑せざるをえない自らの立場に立ち向かおうとするのである。H. B. フランクリンは、22 項目も挙げてヴィアを痛烈に批判

6　C. N. Manlove, “An Organic Hesitancy: Theme and Style in *Billy Budd,*” *New Perspectives on Melville* ed. Faith Pullin（Edinburgh: Edinburgh University Press, 1978）276–277.

し、軍艦を抜け出しペルーを支援しにボリヴィアとの戦いに赴いたあのジャック・チェイスですら、処刑はおろか言葉による穏やかな叱責以外の処罰は受けなかったではないかという[7]。しかし、それはこの作品の世界の話ではない。確かにヴィアが取り仕切る軍法会議は、おずおずと反論する士官たちの「倫理的ためらい」、「哀れみ」、「生来の情」、「自由」、「悲しみ」、「良心」、「自然に生じる葛藤」、「感情」、「不安」などなど、その一つ一つを段階を追って封じ込めていく過程と読むことができる。しかしここで忘れてはならないのは、その過程はヴィア自身の葛藤と苦悩の過程でもあり、彼自身の自然な感情、道徳的ためらい、良心などを、同時に封殺している過程でもあるということである。

軍法会議の後、ヴィアはビリーに自ら会議の結論を伝える。しかしそのシーンには他の士官たちのみならず、われわれ読者も決して立ち合せてもらえず、そこで実際何があったかについては、語り手の推測を聞くことだけが許される。

> Captain Vere in end may have developed the passion sometimes latent under an exterior stoical or indifferent. He was old enough to have been Billy's father. The austere devotee of military duty, letting himself melt back into what remains primeval in our formalized humanity, may in end have caught Billy to his heart, even as Abraham may have caught young Isaac on the brisk of resolutely offering him up in obedience to the exacting behest. But there is no telling the sacrament, seldom if in any case revealed to the gadding world, wherever under circumstances at all akin to those here attempted to be set forth two of great Nature's nobler order embrace. There is privacy at the time, inviolable to the survivor; and holy oblivion, the sequal to each diviner magnanimity, providentially covers all at last.（115）

ヴィアに対して批判的立場を取る批評家たちが、この閉ざされたシーンにつ

7 H. Bruce Franklin, "From Empire to Empire: *Billy Budd, Sailor,*" *Herman Melville: Reassessments* ed. A. Robert Lee（London: Vision Press Limited, 1984）202–206.

いては、しばしば無視しているのは問題ではないだろうか。軍法会議のシーンを取り上げはするが、このシーンについては無視するというのでは、ヴィアを正当に評価することはできないのではないか。このシーンで重要なのは、語り手がヴィアが用いたであろうと思われる言葉を決して直接話法の形で伝えなかったことである。そこにこそ我々がすでに見た二つのシーンとの大きな違いがある。その一つ、ヴィアがビリーに「話しなさい」と「命じた」ときには、ヴィアの抱える矛盾によって事態は思いもかけない方向に悪化した。もう一つは、彼の用いる言語は「行為遂行的」に機能し、士官たちの動揺、ためらい、良心などを封殺する方向に作用した。しかしここ閉ざされた部屋では、ヴィアは言語を用いなかったか、用いたとしても、それらとは異質な言語を用いたであろうと推測される。語り手は「ヴィアは死刑の判決を受けたものに対して何も隠さなかったであろう。その決定において彼自身が果たした役割を率直に明らかにしたであろう」という。つまり、ここには軍艦で常日頃見出された言語行為の封殺は全く見られなかったのだ。「隠さず」「率直に」ビリーに語りかけたヴィアの言葉は、通常は艦上で決して許されないもの、決して聞かれないものなのだ。ヴィアの二重性はここでは一時的であるにせよ溶解し、語り手の言う、「この二人がラディカルに共有する類まれな性質」(114-115)、人間に「原初的な形で存続するもの」が姿を現したと見ることができる。W. バートフの言葉を借りれば、ここでメルヴィルが読者の注意を引こうとしているのは、まさしく「彼の二人のヒーローに見られる驚異的な性格」、言い換えれば、「雅量の神秘」(a mystery of magnanimity) である[8]。(38) R. ミルダーは、ここに作者メルヴィルの「人間性に対する賞賛の感情」を読み取ってさえいる[9]。しかし、同時にこのシーンは、その後直ちに訪れるはずのビリー処刑が、実はビリーと共有するはずのヴィア自身の内なる「原初的なるもの」も殺すシーンになるのだ

8 Warner Berthoff, *The Example of Melville* (New York: The Norton Library, 1972) 193.

9 Robert Milder, "Old Man: the rose and the cross," *New Essays on Billy Budd* ed. Donald Yannella (Cambridge: Cambridge University Press, 2002) 105.

と予知していることを忘れてはならないだろう。

以上、我々読者はイギリス海軍に姿を現した一人の青年が、思いがけない形で「他者」として葬り去られる過程を読んできた。事件の後に出された官報では、クラガートが愛国心に満ちた不運な男となり、ビリーは極悪非道な「よそ者」（alien）となる。しかし、そうした形でビリーを葬り去る過程は、我々が見たとおり、その過程に関わった人間たち自身の人間性を葬る過程でもあった。その意味で、ビリーは「他者」ではなく、彼ら自身の内部の「表象」とみなすことができる。ますます発展を遂げている世紀末の帝国アメリカにあって、メルヴィルは彼の原風景ともいうべきタイピーの谷を思い巡らしていたのかもしれない。しかし彼の作品に繰り返し立ち現れる無垢なる人々の姿は、すでに現実のタイピーを離れ、帝国へと変貌を遂げる「文明国家」の中で抑圧と封殺を余儀なくされる人間性そのものの姿へと変化していたのである。メルヴィルにとって、歴史の進行は同時に「思慮深い」改ざんの過程であった。我々が『ビリー・バッド』を読むということは、ヴィアを有罪にするか無罪にするかではなく、その改ざんの過程を断行する責任を自らに引き受けねばならない立場にあった人物を理解することである。J. ウェンケの辛らつな表現を借りるなら[10]、「読者が決定するように誘われているように見えるのは、これだけの犠牲を要求する文明の価値である。」（137）我々は、処刑のシーンにおいて、「ヴィア艦長に神の恵みがありますように！」と「木の枝から飛び立とうとする小鳥の澄んだ歌声」のような声を発して処刑されるビリーの姿と、同時に、「禁欲的に自己を抑えているのか、感情的なショックのあまり、つかの間の麻痺状態にあったのか、武器係の棚のマスケット銃のように硬直してまっすぐ立っていた」ヴィアの姿の両方を視野に納めなければならない。ヴィアはビリーを処刑することによって自らの「原初的なもの」を殺してしまったのであるが、同時にこのビ

10 John Wenke, “Melville’s indirection: *Billy Budd,* the genetic text, and “the deadly space between”,” *New Essays on Billy Budd* ed. Donald Yannella（Cambridge: Cambridge University Press, 2002）137.

リーの清らかな声は、ヴィア自身の内部に再びその姿を閉じ込めることになったかもしれない。ヴィアが実際に死を迎えたとき、彼の口から出た言葉は「ビリー・バッド、ビリー・バッド」だった。